

広重の金沢八景

江戸時代後期に歌川広重が描いた「武州金澤八景」は、どの辺りで、どこ風景を描いたのでしょう。平潟湾プロムナードから野島に至る道で現在の風景と比べてみましょう。「金沢八景の道」の地図を参考にしてください。

日本での八景の起こりは、今から400年以上も前に中国の瀟湘八景にならって琵琶湖のほとりに設定された近江八景がはじめと言われます。中国が「明」から「清」に替わるころに、長崎に亡命していた心越禅師はのちに徳川光圀の招きで水戸の祇園寺を開山しました。金沢八景は、その心越禅師が能見堂からの眺望に感激して八景の漢詩を詠んだのが始まりです。この漢詩が能見堂（擲筆山地蔵院）に奉納されて評判になると、国学者で歌人でもあった京極高門が八景の和歌を詠みました。その後、瀬戸の内海は新田開墾工事で狭まって美観が損なわれ、金沢八景観光の中心が九覧亭や瀬戸橋、四望亭などに移り、それぞれに八景の浮世絵が売り出されました。中でも広重の絵は最も有名です。

広重の金沢八景の連作には、京極高門の和歌が書き込まれています。読みにくいかなづかいや、むずかしい漢字が書かれているので、次に書き出してみました。広重の絵と、今の景色と、高門の和歌とを比べてみましょう。当時の金沢の美しい景色だけでなく、人々の暮らしの様子が見えてくるようです。

瀬戸秋月：よるなみの 瀬戸の秋風 小夜ふけて 千里のおきに すめる月かけ

洲崎晴嵐：にきはえる すさきの里の 朝けふり はるるあらしに たてる市人

平潟落雁：跡とむる 真砂にもしの 数そへて しほの干潟に 落るかりかね

野島夕照：夕日さす 野島の浦に ほすあみの めならふ里の あまの家々

乙艦帰帆：沖津舟 ほのかにみしも とる櫂の おともうらに かへる夕波

称名晩鐘：はるけしな 山の名におふ かね沢の 霧よりもるる 入あいのこ糸

内川暮雪：木陰なく 松にむもれて くるるとも いさしら雪の みなと江のそら

小泉夜雨：かちまくら とまもる雨も 袖かけて なみたふる江の 昔をそおもふ

瀬戸秋月（せとのしゅうげつ）

かつて瀬戸橋から宮川の上流側は、金沢文庫駅から手子神社あたりまで一面に内海が広がっていました。この内海から、今はなくなってしまった姫小島や、瀬戸橋越しに野島の山に懸かる仲秋の名月を描いたものと思われる。

洲崎晴嵐（すさきのせいらん）

絵の中央を横に延びる石垣は洲崎などにあった塩田と思われる。右遠景の松並木は野島へ続く砂州の野島道でしょう。平潟湾に面した漁師の家に高々と漁網が干してあり、晴れた日に強風が吹いています。



平潟落雁（ひらがたのらくがん）

湾内の干潟では大勢で潮干狩りをしているようです。右端の山は野島で、当時は橋はありません。砂州が延びて松の並木は町屋へと続いています。沖には大きな帆を張った船が往き来しています。羽を連ねて渡る雁が舞い降りている様子を描いています。



乙艦帰帆（おつとものはん）

称名寺に近い町屋から野島へ延びる砂州が発達して陸地ができ、並木の松も大きく育っています。左に突き出した岬は柴町から富岡辺りへと続いています。夕方近くになって、沖を往く船は平潟湾の泊地や湊に帰りを急ぎます。



内川暮雪（うちかわのぼせつ）

国道16号線から関東学院の方に曲がる所に内川橋があります。平潟湾は、侍従川中流の諏訪橋辺りまで内海が奥まっていた。道行く人は、曲がり、上り下りする雪道に足を取られつつ歩かねばなりません。冬の夕方は暮れるのが早いのです。



野島夕照（のじまのせきしょう）

左半分は野島と家並み、右端には烏帽子岩、中央遠景には横須賀の夏島を描いています。手前で漁をしている平潟の内海は、今よりずっと広がったのです。平潟湾プロムナードを歩くとこんな景色が見られます。



称名晩鐘（しょうみょうのばんしょう）

山の中腹の屋根は称名寺と塔頭でしょうか。手前の漁船の漁場は、瀬戸の内海でしょうか。時あたかも暮六ツ。絵の中から鐘の音が伝わってくるようです。漁に出たおかみさんが手を合わせて祈っているようにもみえます。



小泉夜雨（こずみのやう）

瀬戸の内海は、現在の手子神社近くの小泉まで広がっていて、神社の松の大樹は晴れた日でも前夜の露の雫が滴り落ちたといいます。広重は、ここに雨を降らせて描きました。雨に降られて先を急ぐ2人はどこへ向かうのでしょうか。

